

ヒメボクトウの発生について

1 発生の経緯

平成21年6月、角田市のナシ園地内において、ナシの枝幹部でせん孔虫による被害が確認された。幼虫の形態や被害症状からボクトウガ類の一種と推測され、農林水産省横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、ヒメボクトウと判明した。ヒメボクトウによるナシでの被害確認は県内では初めてである。他県ではナシやリンゴでの被害が報告されている。

2 発生状況

- (1) 発生作物 日本ナシ
- (2) 害虫名 ヒメボクトウ{*Cossus insularis* (Staudinger)}
- (3) 被害の様子 ナシの枝幹部で幼虫が食入したことによる虫糞と木屑の排出、樹液の滲出(しんしゅつ)がみられた。幼虫は赤紫色～赤褐色をし、数十匹ほどの集団で生息していた。

3 形態および生態

(1) 形態

幼虫は体長約10～40mm、芋虫状で赤紫色～赤褐色をしている(図1)。成虫は開帳約40～60mm、灰褐色で全身が鱗粉で覆われており、前翅には波状の黒線がみられる(図2)。

(2) 生態

卵は卵塊で樹木の粗皮下や切除枝の基部の隙間に産み付けられ、ふ化した幼虫は枝幹部内に食入して集団で生息し、幼虫態で越冬する。不明な点もあるが、1～2年程度で羽化するとされ、羽化時に蛹殻が脱出口に残される。成虫は年1回、7～8月に発生する(福島県の調査では、フェロモントラップでの誘殺数のピークが7月中下旬に確認されている)。

(3) 寄生植物と加害部位

寄生植物はヤナギ、ポプラなど。徳島県、秋田県、福島県ではナシやリンゴで加害報告がある。加害部位は枝幹部。

(4) 被害の特徴

枝幹部に食入し、加害部位から虫糞と木屑の排出、樹液の滲出(しんしゅつ)がみられ(図3、4)、高温時には、樹液が発酵したような独特の異臭がする。加害を受けた寄生樹は枝幹内部が空洞となるため、樹勢が低下し、食害が多いと枯死する。

(5) ボクトウガとの違い

ヒメボクトウとボクトウガの幼虫は外見からの区別が難しいが、ボクトウガの幼虫は、クヌギなどの樹皮を食害し、単独で枝幹部に生息するとされている。ヒメボクトウの幼虫は老熟幼虫まで集団で生息することから、ボクトウガの被害とは区別することができる。



図1. ヒメボクトウ幼虫



図2. ヒメボクトウ成虫
(秋田県病害虫防除所提供)



図3. ナシ枝幹内部のせん孔被害



図4. ナシ枝幹部の排出孔の様子

4 防除対策

- (1) 被害部位の枝幹は、せん除を行って適切に処分する。
- (2) 粗皮部は産卵場所となるため、ナシの休眠期に粗皮削りを行う。
- (3) 薬剤防除では、ナシに対して、生物農薬スタイナーネマ・カーポカプサエ剤(バイオセーフ)を幼虫発生期に使用する。

適用作物	薬剤名	使用時期	使用回数	使用量 / 希釈液量	使用方法
ナシ・リンゴ	スタイナーネマ・カーポカプサエ剤(バイオセーフ)	幼虫発生期	-	2500万頭(約10g)/25L	木屑排出孔を中心に薬液が滴るまで散布または樹幹注入する

(平成22年1月1日現在)